



「下村満子の生き方塾」ニュース

Vol.06 2016.11

—9月勉強会・有朋高等学院出前塾合併号—



あの穂吉さんが講義

「下村満子の生き方塾」は9月24日、東京・高田馬場のIZUNOME TOKYOで9月勉強会を開きました。10分間坐禅に続いて、菅野寿男塾生のリードで塾生五訓を唱和しました。塾生五訓の唱和は「生き方塾」の原点を、塾生全員で確認するため、今回から定例化しました。この後、7月に引き続いて入塾説明会、午後からは塾長講話、今回の目玉である世界を舞台に今なお第一線で活躍するジャズ・ピアニスト穂吉敏子さんが応援団講義を行いました。(文責・皆川猛)

入塾説明会

●男性1人が即入塾

7月に引き続いて行われた入塾説明会には、「生き方塾」とはどういう塾かを知りたい男性2人と女性3人の5人が出席しました。「生き方塾」の活動を15分にまとめたDVDを上映し、塾長が、なぜ今「生き方塾」なのか、をテーマに話をしました。塾長の話を要約すると、以下のようになるかと思えます。

- ①先の戦争に敗れた日本は焼け野原になって、全てを失ったが、死に物狂いの努力によって、つい4年前までは世界第2の経済大国として、成功モデルとして世界から羨ましがられた。
- ②しかし、経済的に豊かになるにつれて、その結果として、拝金主義、物質中心主義がはびこってしまい、日本人が本来持っている大自然への畏敬の念、利他の心、謙虚で質素な生き方などを忘れるなど、「心の劣化」が進んでしまった。にもかかわらず、現政権は相も変わらず、「成長」「成長」と叫び、「成長教」に憑りつかれている。
- ③今、日本は経済をはじめ、政治的にも、教育の面でも危機を迎えているが、それらを他人のせいにはいけない。日本の再生は日本人の「心の再生」から始めるしかなく、それには一人ひとりが変わることから始めなければならない。
- ④「生き方塾」では「いのちとは何か」「生きるとは何か」「人は何のために生きるのか」といったことを話し合いながら、心を高め、揺るぎのない自分、「ブレない自分」を作り上げ、実践の出発点とする場である。
- ⑤混迷する今だからこそ、「ブレない自分」の確立が大事だ。他人の顔を窺ったり、他人の評価ばかりを気にして、自分が本当にしたいことを見つけられないのでは、その人の生き方は不幸である。あなたの人生を生きるのは、あなた自身であり、他人があなたについて色々言ったところで、あなたの人生に責任を取ってくれないからだ。
- ⑥下村のバックボーンは「禅」であり、これまでの歩みは、成功も失敗もあるが、「禅」が説く因果必然、完全燃焼の精神を基にした生き方、考え方を塾生に説いている。こうした考えを押し付ける気はなく、一人一人がそれぞれ「ブレない自分」の生き方をつくればいい。
- ⑦「生き方塾」は心を高め、人間力を高め、生き方を高め、他人のお役に立てる人間になるための塾。この塾で得たものを、一人ひとりが何らかの形で実践していけば、福島復興も日本の復興も必ず実現するはずだ。



塾長の熱い話に続いて、菅野寿男、伊東優子、山本亮二郎の三塾生が『「生き方塾」と私』をテーマにスピーチをしました。



・福島県いわき市に住む会社員の菅野さんは「人は困難に直面する時、その人の本性が現れることを東日本大震災と原発事故の際、痛感した。これがきっかけとなり、心を高めたいと思って入塾した。塾長はじめさまざまな人の話を聞き、今は地域のボランティア活動を通じて利他を実践している。入塾してよかった」と話しました。



・福島市に住む会社役員伊東さんは「福島民友が連載した塾長の半生を読んで、下村塾長に興味を持った。その後大震災があり、子育てと会社経営に追われていたが、そんな時だからこそ、と入塾した。自分ができることは何か、と考える際、『人として正しいことは何か』という教えは、判断の基準となっている。この塾ではいろんな考え、話を聞くことができ、『気づき』も沢山ある。一緒に学びましょう」と入塾を呼びかけました。



・東京在住で経営者の山本さんは「4期から入塾している。仕事はベンチャー企業への資金援助だが、自らもフランチャイズを3つ程やっている。特にスープの会社では、ろうあ者だけで運営しているところもあり、これは利他の実践だ。健康者だけを雇用し、罰金を払う方がコストは安く済むが、この塾で学ぶ以上、『世のため・人のため』を実践することが使命だと考えている。障害者の雇用を増やす企業への支援を、これからも行っていこう」と、意気込みを語りました。

塾生の話の後に、5人の参加者は「素晴らしい塾だ。入塾の方向で考えたい」と異口同音に語り、そのうちの男性1人は入塾を決めました。

塾長講話

●いい波動は共振する

塾長講話に先立って、応援団の1人でCMC(カーボン・マイクロ・コイル)を研究している元島栖二先生が「CMCと波動診断」と題して特別講演をしました。元島先生の話は次のような内容でした。

——CMCを発見した時、物質のらせん構造(ヘリカル)を研究している私に、神様がCMCを与えてくれたと思った。私はらせん構造を10数年研究しており、何とか社会に還元しなければ、と思っていたからだ。らせん構造は宇宙を形づける最も基本的な構造だ。故郷の飯田に10数年前研究所を建てた時、下村塾長に「これは凄い発見。ぜひ研究を続けて下さい。」言われたことを覚えている。

この世には目に見えない粒子の振動があり、同じ性質、好ましい関係のもの同士は共振し、異質なものは、相反する関係のものは共振しないという特質がある。では、なぜCMCを服用すると、がんが治るのか。遺伝子と同じ構造をしたCMCからは、いい波動が発信しており、がんなど有害なものを体外に排出する作用があるからだ。

言い換えれば、悪い波動は悪い波動を呼び寄せる。がんの場合は水や食品に含まれている水銀が集まってがんの芽になるが、水銀が集まるとまた水銀のほかにがんの成長を助ける各種の物質が集まり、本格的にがんが増殖し始める。CMCを体内に取り込めば、波動が共振しないから、発がん性物質を体外に排出することになって、がんは縮小する。

下村塾長が実践している坐禅が、どうして心の安定に役立つかという点、「愛のホルモン」と言われるオキシトシンの分泌が盛んとなるからで、CMCは坐禅と同じようにこのオキシトシンの分泌を促す作用がある——。ただCMCは服用をやめると、すぐオキシトシンの分泌がとまるけど、坐禅は永續する点、より優れている。

●完全燃焼の人生を送る穂吉さん

元島先生の特別講演に続いて下村塾長が講話をしました。——今日の応援団講話は、世界のジャズシーンで知らない人はいないというジャズ・ピアニストの穂吉敏子さんです。私との対話スタイルで穂吉さんに語ってもらいますが、その前に、今年3月に放映されたNHKBS1スペシャル「TOSHIKO〜スウィングする日本の魂」を見ます。

穂吉さんは、12月には満88歳の米寿を迎えますが、世界中を飛び回り、日本には4日前に来て、一昨日の夜は銀座のヤマハホールでソロ・コンサートを開いたばかりです。彼女はソロ・コンサートの場合、必ず「ロング・イエロー・ロード(Long yellow road)」を演奏します。この曲は、1959年秋、アメリカに渡り4年目に入った彼女が、この国の唯一の文化であるジャズを演奏する「黄色い」自分が、これから始まる長く険しい道を想像して作った曲で、彼女の代表作の一つに挙げられ、テーマ曲となっています。音楽生活70周年を迎え今なお精力的に活動を続ける穂吉さんは、4月にNYで

録音した最新スタジオアルバム『ポーギーとベス』を発表しました。アメリカの国民的作曲家、ジョージ・ガーシュインの代表作であるオペラ「ポーギーとベス」から9曲を選び、ソロ、デュオ、トリオで演奏した渾身の作品で、発売と同時に高い評価を得ています。物語は黒人の悲恋物語です。



講演する元島先生

穂吉さんにはアメリカ人の前夫との間に生まれた娘が一人いて、名前は月曜日に生まれたから「マンディ満ちる」。貧しいゆえに、ジャズを取るか、育児を取るかという厳しい選択を迫られた彼女は、子どもを大分県にいる姉に預けて、ジャズに打ち込み、それは親子間に深い亀裂を生みました。女の子はやがて、母親と同じように音楽の道に入り、シンガーになり、穂吉さんが子どもを手放した際に味わった悲しみや寂しさを書き綴った日記を読むうちに、母親の気持ちが痛い程分かり、今では一緒に演奏旅行をするほどにまでなりました。

穂吉さんは27歳の時、アメリカのバークリー音楽院に留学し、異郷の地でさらにDNAのスイッチがONしたのです。それは私がニューヨーク大学の大学院に留学した時と同じです。眠っているDNAをONするには、自分を全く違う環境に置いたり、利他を行ったり、自分が好きなワクワクすることをしている時で、穂吉さんは、これらを実践しているから、穂吉さんは一貫して、自分の選んだ、好きな道を、ひたすら駆け抜けてきた方で、いつまでも若いのだと思います。話を戻しますが、私がよく言う「完全燃焼」の人生を送っているので、実際私と穂吉さんには、共通点が多いとよく思います。

私たちは年齢の差こそありますが、ともに満州(中国東北部)に生まれ育ち、第二次大戦が日本の敗北で終わって、その終戦の混乱の中、無一文になって日本に引き揚げてきました。穂吉さんは広島、私は佐世保が故国への引き揚げ第一歩の地でしたが、彼女は小1の時から習ったピアノを弾きたくて、引き上げてすぐの16歳の時から、進駐軍が管理するダンスホールでピアノを弾いて、それから70年、一貫してジャズピアノ奏者として、自分の道を歩き続けています。私も活字周辺の仕事をしたいと思いついて、いろいろ障害もありましたが、今でもジャーナリストとして、仕事を続けています。

つまり、自分はこういう道を歩きたい、と本当にやりたいことを見つける努力をしていけば、自ずと道は開けるものです。これが「ブレない自分」ということであって、「文句あつか!」ということです。ただし、自分の生き方を押し付ける気は毛頭ありませんよ。私が長々しゃべるよりは、まずDVDを見てください。この後、休憩を取り、穂吉さんとの対談に移りたいと思います——

DVD上映

●ジャズマスターのピアニスト

ナレーション——今年デビュー70年を迎えるジャズピアニスト、穂吉敏子。日本人としてただ一人アメリカ・ジャズ界の最高峰「ジャズマスター」の称号を贈られ、今もNYを舞台に活躍を続けている。26歳で渡米後、人種や女性差別を受けながらも、ジャズと和の要素を融合させ、独自のジャズを開拓。ピアニストとして、日本人として、一人の女性として闘い続けてきた穂吉の人生を、番組のために特別収録した演奏を交えながら伝える——。

——1950年代から日本とアメリカを拠点に活動。その才能はバド・パウエル、チャールズ・ミンガスからも認められ、1973年に夫であるルー・タバキンと結成したビッグバンドは30年間の活動中に多くの名盤を生み出した。1997年には紫綬褒章を受章。1999年には国際ジャズ殿堂入り、グラミー賞へのノミネートは14回にわたる。2006年には最も権威あるアメリカ国立芸術基金 (NEA) ジャズマスターズ賞受賞するなど、日本の女流ジャズピアニストの草分けとして絶賛される穂吉の、波乱と激動の人生を特集する——

【穂吉の娘、マンディ満ちる】ジャズピアニストとして世界のファンを魅了するママだが、その道は決して平たんではなかった。むしろ困難の方が多かった。アメリカでのデビュー当時は、着物で演奏することを求められた。ジャズを演奏する日本人への仕事の申し込みはなく、生活に行き詰まったママは、一人娘の私を手放した。ピアニスト生命の危機にも直面した。手の筋肉が萎縮する病に冒された。想像を絶する苦難を乗り越えて、今のママがいる。デビュー70年を迎える今年、新たな挑戦が始まった。そこには80歳を超えてなお、前に進み続けるママの姿があった。ジャズ界のレジェンドになったママ穂吉敏子。70年の歴史をドキュメンタリーと演奏で語っていく。

私のホームタウンNY。ジャズ専門店がひしめき合い、毎夜プレーヤーは火花を散らしている。ママが1人アメリカに渡ってから60年の月日が流れた。86歳になった今も毎日2時間以上ピアノに立ち向かうママ穂吉敏子。指の筋肉の衰えを防ぐため、鍵盤は通常より重くしている。ママはニュー Yorkerなのに待みたい人だ。

【穂吉】一日練習しないと衰えが自分で分かり、二日しないと仲間に分かり、三日しないと聴衆に分かってしまう。80年近くピアノを弾いているけれども、なかなか上手にならない。音楽的には育っているけれども、10代の時の方が上手かったと思う。

【マンディ満ちる】今年でデビュー70年。ママがピアノに出会ったのは世界が激動する時代だった。

【男声ナレーター】満州事変が起きる2年前、1929年12月に穂吉敏子は旧満州に生まれた。ピアノに出会ったのは7歳の時。学芸会で聞いたピアノの音色に夢中になった。しかし15歳の時、敗戦によって人生は大きく変わる。財産を全て

失い、着の身着のまま故郷の別府に引き揚げた。当時の別府には進駐軍のためのダンスホールがあった。16歳になった穂吉は「ピアニスト求む」という張り紙を見て迷わず飛び込んだ。プロのピアニスト穂吉敏子の誕生だ。別府時代、穂吉は自らの運命を決める一枚のレコード盤に出会う。それはテディ・ウィルソンという人が弾いた「スイート・ロレイン」という曲で、初めて聞いた本場のジャズの虜になった。

【穂吉】目的もなく、何となくピアノをひく毎日を送っていたけれど、どうしたらあのように素晴らしく弾けるのかという目的・課題ができた気がする。

【男声ナレーター】デビュー70年の節目の年。穂吉自ら、人生に刻まれた思い出の数々の曲をピアノで綴ってくれることになった。

アドリブが命といわれるジャズ。86歳の穂吉の体力を考え、収録は一発で臨むことになった。70年のピアノ人生を語るジャズドキュメンタリー。最初に挑むのはジャズピアニストの出発点となったあの曲「スイート・ロレイン」だ。

——演奏流れる——

まだジェット機が飛んでいなかった1956年、穂吉は独りアメリカに渡った。留学先となった名門バークリー音楽院。当時はジャズ専門学科を設けたばかりのボストンにある小さな学校だ。まだ知名度が低かったバークリー。穂吉は宣伝に駆り出された。日本人のピアノ弾きの女の子として売り出し、注目を集めようとした。和服を着て、職業を当てるテレビの人気クイズ番組にも出た。穂吉はことあるごとに和服を着てピアノを弾くよう頼まれることになった。物珍しさもあって瞬く間に全米で話題になった。穂吉は、ピアノの実力で認められたいと必死であった。

当時アメリカはジャズの黄金期。ジャズ・ジャイアンツたちが至るところで演奏していた。ジョン・コルトレイン、ディジー・ガレスピー、そしてルイ・アームストロング。穂吉はジャズクラブに入り、ジャイアンツとのセッションで腕を磨いた。その一人、ジャズの帝王マイルス・デイビス。穂吉は最初に共演した時のことを今も鮮明に覚えている。

【穂吉】彼はピアノの脇に立ち、ずっと見ているわけですよ。そして「きみはナーバスだな。でも気にするな。自分もチャーリー・パーカーとセッションした時はナーバスだったから。緊張するなよ」と言ってくれました。

——演奏流れる——

【男声ナレーター】ジャズジャイアンツと共演を重ね、ピアニストとして成長していった穂吉が最も影響を受けたのはバド・パウエルだった。独創的なアドリブとスピード感あふれるピアノで知られるバドは、ピアノ、ベース、ドラムのトリオ編成を広め、モダンジャズの開祖と呼ばれている。

【穂吉】自分が音楽で伸びようとしていた時に出会ったのがバドだった。で、そういう人の影響は生涯残ると思うの。どうしてか。彼は胸を打つ豪快な演奏をして、それは私を引きつけた。

【男声ナレーター】バドのようにになりたい。レコードがすり減るまで聞き込み、練習を重ねた穂吉。やがて「女バド・パウエル」とまで、称賛されるようになった。流れるようなスピードで高度な指のテクニックが求められるバド・パウエルの曲。86歳になった穂吉はバドの曲を弾きこなせるように、今でも指の鍛錬を欠かさない。

——演奏流れる——

【マンディ満ちる】ママがアメリカで暮らし始めて今年で60年。でもママはアメリカの市民権を得ていない。

アメリカの市民権は要らない!

【穂吉】アメリカに長く住む日本人は、便宜上、アメリカ市民になるけれど、私にとってはアメリカはあくまで仕事場であるからだ。それが日本人としての、アイデンティティ。

【マンディ満ちる】日本とアメリカの血が流れている私。アメリカはいろんな人種の移民を受け入れ、新しい文化を作り出してきた国だ。でもママは、いつもこの国で人種の壁を意識してきた。ママがアメリカに来た1950年代、人種差別に反対する黒人の公民権運動が広がっていた。ジャズは黒人だけのものだという主張も強まった。黒人以外のミュージシャンは、ジャズクラブへの出演を断られることもあった。「女バド・パウエル」と所産されていたママだったが、単なるバドのコピーと評され、次第に演奏できる場所を失っていった。

【穂吉】「彼女の本質を疑う」ということを書いた批評家があった。ジャズは黒人の音楽であり、黒人でない穂吉はauthentic[正統派]ではない、というわけだ。

【マンディ満ちる】このころのママは、プライベートもうまくいっていなかった。バークリー音楽院を卒業後に結婚した私のパパであるサクソ奏者・チャーリー・マリアートとの幸せは長く続かなかった。ママが33歳の時、私が生まれた。でも二人は程なく離婚した。シングルマザーとなったママは、経済的に追い詰められていった。ジャズと子育ての間で悩んだママ。結局私を日本の伯母に預けることにした。

【穂吉】何か自分の存在価値がないような気がしていた毎日だった。自分の存在価値がないと思った時は、何とも言えない恐怖感を感じた。自分が浜辺の砂の一粒みたいな気がした。

【マンディ満ちる】絶望の中にいたママを救い上げてくれたのは、ジャズジャイアンツだった。その一人が、ベーシストのチャールズ・ミンガス。「僕はきみが天才だと思うよ」とママを励ましてくれた。このころのママは日本人である自分の表現法を捜していた。日本の民謡を大胆にジャズにアレンジし、「木更津甚句」はジャズピアニスト穂吉敏子の代表作となった。

——「木更津甚句」演奏——

【マンディ満ちる】嬉しそうなおママ。この日が86歳の誕生日。誕生日を祝ってくれているのは、ママの再婚相手である私の育ての親・ルー・タバキン。ルーもサクソとフルートを奏でる世界的な奏者だ。大切な日には、ルーは必ずママのために料理の腕を振るってくれる。共演したことをきっかけに二人は1969年秋に結婚した。出会ってから50年。人生のパートナーだけでなく、ミュージシャンとして互いに必要としてきた。

【穂吉】彼は私より10倍も優れたミュージシャンですから、一番尊敬しているミュージシャンは誰ですかと聞かれたら、躊躇なくルーだと言います。

躊躇なくルーだと言います。

【マンディ満ちる】ルーと結婚した時ママは40歳。相変わらずジャズの仕事は少なかった。再婚を機にママは71年8月、日本に預けていた私を呼び寄せ、家族のために生きようと考え、ジャズをやめる決心をした。そんなママを引きとめたのはルーだった。

【ルー・タバキン】才能を自ら葬り去るのは、自分に対する大きな罪だと説得したような記憶がある。

【男声ナレーター】1973年穂吉とルーは16人編成のジャズ・ビッグバンド「アキヨシ・タバキン・ビッグバンド」を結成した。ちょうどそのころ、穂吉を突き動かす大きな出来事があった。穂吉と交流のあったジャズジャイアンツの1人、「神様」と呼ばれたデューク・ウェリントンが亡くなった。穂吉は著名な音楽評論家が書いたデュークの追悼記事を読んだ。そして自らが進むべき道を気づかされた。

【穂吉】記事には、彼のジャズの根底には彼の人種がベースになったものが多いとありました。そうか、私も自分の人種、民族性をジャズの根底に置くようにしようと思った。ジャズジャイアンツからもらった貴重な経験と、日本の伝統を持つジャズミュージシャンという私のユニークな立場を生かして、日本文化とジャズを融合したジャズ音楽を創作しようと考えた。

【男声ナレーター】日本人としてのルーツをもっと見つめるべきだと考えた穂吉は、日本の書物を読み漁った。世阿弥、芭蕉など日本人の思想、伝統を掘り下げることで自分にしかできない表現を追究した。

【穂吉】日本人の伝統を生かしたジャズ、普遍性のあるジャズ音楽を創作する、創作しようという努力をすることによって、ジャズの歴史に恩返しできるのでは。それが私の仕事だと思った。

【男声ナレーター】1974年、穂吉はジャズ界に大きな衝撃を与えた。新作「孤軍」を発表した。ジャズに能で用いる鼓、謡を大胆に採り入れた。

——「孤軍」の演奏——

【男声ナレーター】曲の着想は、戦争が終わったことを知らずに、フィリッピンジャングルに潜み、一人孤軍として生きていた小野田陸軍少尉。

【穂吉】テレビに映った、軍服で戦闘帽を被り、米軍に軍刀を渡す小野田少尉の姿は、私の心を揺さぶった。この曲は、孤軍奮闘していた彼に捧げようと思って、「孤軍」と題を付けました。人間形成に一番必要な20代はおろか、30代、40代を失った小野田少尉に心が痛んだ。私自身もアメリカでは孤軍だ、と思った。今でも孤軍ですが。

【男声ナレーター】非難を覚悟して発表した「孤軍」。しかし異例の大ヒットとなった。以降、次々と話題作を送り出し、ビッグバンド人気ナンバーワンの地位を確立していった。ビッグバンドを舞台に、穂吉の作曲家としての資質は開花し、ジャズを通じて社会的なメッセージを発するようになった。

1976年に発表した「ミナマタ」。平和な村が公害によって蝕まれていく様子を20分にも及ぶ大作として描いた。

——「ミナマタ」演奏——

【穂吉】私がジャーリストでペンを持っていたとすれば、きっと文章で水俣病を記録したと思う。しかし私はジャズミュージシャンだから、ジャズで悲惨な水俣病を記録したことになります。

【男声ナレーター】穂吉はグラミー賞に14回もノミネートされ、2007年にはアメリカジャズ界の最高峰「ジャズマスター」の称号を贈られた。日本人として、女性として、差別、偏見、挫折を乗り越え、手にした栄光だった。

【穂吉】自分の可能性は分からないものです。自分の可能性がこれだけあるのに、ここで諦めたら、これは自分に対して不誠実だと思うのですよ。だから自分の可能性を磨くことは、自分に対する義務だと思うのです。これだけのものを持っているのに、ちょっと上手くないからと、この辺でやめちゃったら、自分に不親切です。

【マンディ満ちる】ママが必ずコンサートで演奏する曲がある。
——「ロング・イエロー・ロード」演奏——

【マンディ満ちる】黄色人種である日本人のジャズ演奏者がアメリカで生きていく「決意」を表した曲だ。その決意は86歳になった今も、少しも変わらない。

【穂吉】勝つことはできないけれども、勝とうとする努力はできる。この曲に込めたのは、こういう思いです。

【男声ナレーター】去年(2015年)6月。ニューヨークの中心部にあるスタジオ。6年ぶりに自身の新作アルバムを作りに臨んだ穂吉。しかしこの日、穂吉は精彩を欠いていた。何度も演奏を中断していた。リズム、ビートが合わない。穂吉が取り組んでいたのは、アメリカ・オペラの傑作「ポーギー&ベス」だ。物乞いのポーギーと娼婦ベスの恋の物語で、出演者のほとんどが黒人という異色のオペラだ。作曲したのは38歳の生涯に多くの名曲を世に出したジョージ・ガーシュイン。貧しいユダヤ系移民の子として生まれ、差別など厳しい境遇に苦しんだ。「ポーギー&ベス」で、同じ厳しい境遇に置かれた黒人を見詰めたガーシュイン。その眼差しに穂吉は深く共感した。そして自らのアレンジで残したいと願うようになった。

——穂吉たちが練習している——

【穂吉】ユダヤ人はアメリカの社会の中で、やはり偏見を持たれた時代でした。黒人は白人と同じバスに乗れなかったとか、いろいろあります。ガーシュインは差別、偏見に苦しむ同士のアイデンティティを持ったと思います。

【男声ナレーター】オペラの曲として書かれた「ポーギー&ベス」は頻りにリズムが変わるのが特徴だ。この曲をジャズの基本に沿ってアレンジすると、どうしてもリズムに狂いが出てしまう。特にソロを取るのが難しい。その内容の高さゆえに、マイルス・デイビス超一流ジャズミュージシャンだけがアレンジに成功してきた。5時間以上ピアノに向かっていた穂吉。疲労がピークに達していた。レコーディングは後日やり直すことになり、新作の発表も延期となった。

【マンディ満ちる】今年は私たち親子にとって、大事な年になった。7月下旬、ママと私にとって特別な二週間が始まっていた。願いであった私とママとのジョイント・ツアーが実現したのだ。22歳の時、ママを追って音楽の道に入った。それから30年、アメリカや日本を舞台にシンガー・ライターとして頑張ってきた。でも偉大なママとの共演が実現するま

では、長い時間が必要だった。1963年8月、ママが33歳の時に私は生まれた。月曜日に生まれたから「マンディ」、人間として満ちて欲しいとの願いから「満ちる」と名付けられた。私は2歳の時、ママは離婚してシングルマザーになった。子育てをしながら、夜は私を家に置いて、朝までクラブやホテルで演奏する日々が続いた。

【穂吉】アパートの家賃をやっと払っての生活だった。これが7、8年続きましたから、このまま自分がジャズミュージシャンをやるのはどうかと悩み始めた。子育てにはお金がかかるけれど、収入が足りないし、見通しも立たない。自信もなかった。【マンディ満ちる】私を育てるために、ジャズを諦めるべきか。悩みぬいたママは、辛い選択をした。

【穂吉】やっぱりジャズとニューヨークに未練があったということになりますね。もうちょっと名前が出て、仕事の依頼の電話が来るのではと思って、子どもを姉に預けたのですが。でもどうしてこんなことになったのかな、と非常に情けなかったですね。

【マンディ満ちる】ニューヨーク郊外にあるママの別荘。私は最近、ここに引っ越してきた。この写真は幼稚園の時、別府の伯母さんと一緒です。荷物の整理をしていた時、私は偶然、ママの昔の日記を見つけた。幼いころの私の写真が挟んであった。私を預けた時のママの思いも綴られていた。「1966年3月11日、満ちるを姉に預けた。その方が彼女にとって幸せだから。いつかきっと許してくれると信じている。全ては彼女のためだから」

初めて知るママの思い。当時私が書いた手紙も大切にとってあった。「ママが満ちるの誕生日に来てくれるとお婆ちゃんが言いましたので、とても楽しみです。その時に満ちるもアメリカに帰りたと思っています」。私は5年間、待ち続けた。ママが迎えに来たのは、ルーと再婚し、生活が安定してからだった。一緒に暮らし始めてからも、人気絶頂のビッグバンドを率いて、ツアーに行っている方が多かったママ。私と過ごせる時間は限られていた。

【女声ナレーター】娘がいよいよ卒業となった時、私はコンサートがあつて出席してやれなかった。私は娘にとって必要な温かみのこもった愛情を与えることができず、私と娘の間には普通の親子にない溝ができていたのではないかと思う。【マンディ満ちる】私の心の中には、小さいころからいつも、ブルースな気持ちがある。それはママとの関係が影響しているのだと思う。私も自分の子どもを持ち、離婚も経験した。子どもを育てながら、音楽をする大変さが分かるようになった。去年、レコード会社の提案をきっかけに、ママとのデュオ・アルバムが実現した。そのライナーノートに、母への思いを記した。《英文省略》

アルバムの完成に合わせて始まったママとのデュオ・ツアー。会場に着くとママはすぐにステージに向かう。どんな状況でも最高の音楽を目指そうとするママ。あらためてミュージシャンとしてのママをリスペクトするようになった。そしてママと二人きりで過ごす時間。ママと演奏旅行していても、二人で旅しているようでとても面白かった。

——デュオコンサート会場——

夢にまで見た二人並んでのステージ。

—— 稯吉のピアノに合わせマンディ満ちるが歌う——

【男声ナレーター】束の間の日本滞在。合間をぬって知人のレコードコレクターを訪ねた稯吉。シャンパンを飲みながら耳を傾ける。ジャズの名演奏。稯吉にとって、至福のひとつだ。

—— ジャズのレコード演奏流れる——

7歳の時から稯吉のピアノへの情熱は変わっていない。その稯吉が、かつて演奏家生命の危機に直面した時がある。2000年、70歳になった稯吉を病が襲った。両手の筋肉が委縮して指が曲がり、思うように動かさなくなったのだ。左手にメスを入れた。

【稯吉】ここをこのように順々に切っていくわけ。

【男声ナレーター】手術後、鍵盤を叩く力を取り戻すため、稯吉は過酷なリハビリを続けた。辛いリハビリを終えた稯吉はピアノを弾ける喜びを強く、かみしめた。

【稯吉】最初はハンドバックも持てなかった。ようやく、鍵盤を叩けるようになって、鍵盤を押し音が出た時は、思わず涙が出た。

【男声ナレーター】このころ、稯吉が広島原爆をテーマに書いた組曲の最終楽章「ホープ」。絶望の中に、人は希望を持つことができるというメッセージを込めた。アメリカの同時多発テロの後、稯吉はコンサートで必ずこの曲を弾いている。86歳の稯吉が挑む「ポーギー&ベス」のジャズアレンジ。演奏に納得がいかなかったところを、採り直すことになった。難しいリズムに合わせながら演奏するアドリブのイメージを、眠る間も惜しんで構想を重ねてきた稯吉。思い描いていた演奏に近づいてきた。決して妥協しない稯吉の姿があった。

【稯吉】100%尽しても足りない。でも私は、音楽的には成長したと思いますね。昔よりも、バドよりもうまくなった、昔よりもやる内容がよくなったと思うし、そう思いたい。稯吉の最新作「ポーギー&ベス」全9曲が完成した。オペラの中で、ポーギーとベスが愛を誓う場面で歌われる「アイ ラブ ユー ポーギー」。稯吉のピアノアレンジが、どんな仕上が

りになったであろうか。

——「アイ ラブ ユー ポーギー」ピアノ演奏——

【男声ナレーター】2月、稯吉のデビュー70年を祝うイベントが行われることになった。13年前、惜しまれながら解散した「トシコ・アキヨシ・ジャズオーケストラ」が、稯吉の節目の年に再結集し、一夜限りのコンサートを開く。このバンドは、稯吉のオリジナル曲しか演奏しない。個性豊かな16人のジャズメンを稯吉がリードする。

—— 稯吉が練習を指導する——

【男声ナレーター】ジャズに日本の伝統を採り入れ、世界的に評価された稯吉。今回のコンサートでは、稯吉が初めて和楽器を使った曲「孤軍」を演奏する。ビッグバンドのリハーサルが終わった後、鼓と和太鼓の演奏者を自宅に招き、ジャズと日本の旋律の二つをどう融合するのか、あらためて追究した。【稯吉】ジャズの1、2、3、4、5、6といったリズムと邦楽のリズムは違うけれども、最後はきちんと合わせなくてはならない。異物を食べた時、何か喉につかえる感じがします。いい食べ物はスーッと通って、胃の中でこなす。音楽も同じ。そうでないと、聞いてくれる人たちがスーッと入らず、違和感を覚えてしまうジャズになります。

【マンディ満ちる】いよいよママのビッグバンドが復活する。その本番の日。舞台はニューヨークにあるジャズの聖地。多くの名演奏を生んできた最高の聖地だ。

—— 鼓とタバキンのフルート合奏。続いて次々と演奏。大きな拍手でフィナーレ——

【マンディ満ちる】稯吉敏子、86歳。ママの「ロング・イエロー・ロード」はこれからも続いていく。

【稯吉】あと千年というやつですよ。少しでも前向きで前進していればいいなと思う。でもそれまで生きていられるかどうか分からないしね。ハッハッハ。でも少なくとも、死ぬまでは前進したいなと思います。

【DVD終了】

塾長・稯吉対談

● 干渉しないのが一番

DVD上映が終わった後、いよいよ稯吉さんと塾長の対談が始まった。以下に主なやり取りを要約します。

下村 どうしてさまざまな楽器の中で、特にピアノが好きなのですか？

稯吉 7歳の小1からピアノを弾いているけれど、ピアノは理知的だし、自分の体の延長だと思う。鍵盤を押すと音が出るけれど、その音そのものが好きなの。怪訝に感じるかも知れないけれど、ピアノは打楽器であっても、一つ一つ違う演奏者との相性もあります。だからピアノが好きなの。

下村 ピアノを弾いて80年。そのエネルギー源は何ですか。

稯吉 自分が本当に好きなことは、いつまでもできる。ジャズは即興演奏・アドリブが必要ですが、寝てばかりではできません。普段から練習しているわけで、それでも納得のいくいいアドリブは年に1回しかありません。この次にこそ、この次にこそと、追究するから頑張れるのです。

下村 ジャズと関わって70年ですが、一番しんどい

と言うか、辛かったことは何ですか。やはり、娘さんを手放した時？

稯吉 ジャズミュージシャンは演奏旅行をしないと生活できないし、仕事は夜の10時から朝の4時までというものですから、ジャズを取るか、子育てを取るかと追い詰められました。自分はその時、ジャズを取りましたが、お金があったら多くのことは解決できます。娘を姉に預ける前に、昼の仕事に就きたいと思って職安に通いましたが、タイプもできないし、速記もできませんから、仕事はありませんでした。今、言われたように、4歳の「満ちる」を手放した時が一番つらかった。でも、今ようやく「満ちる」とは、いい親子になれました。

下村 ご主人ルー・タバキンさんは、私も何度もお会いしていて、とても素晴らしいパートナーであり、超一流のミュージシャンで、羨





ましいくらい仲がいい。秘訣みたいなものがあるのかな。

穂吉 いいテナー奏者を捜していたら10歳年下のルーがいて、お互いに音楽上のいいパートナーが必要だったから、一緒になりました。私たちはお互いの分野を干渉しないことにしており、それぞれの生活サイクルも干渉しません。例えば、彼は朝食をしっかり食べるけれども、私はコーヒーだけ。練習のフロアも別。ただし夕食だけは一緒です。私たちは食べるのが好きで、好みもほとんど同じだから、長持ちしているのかもしれない。

下村 ソロのピアニストからビッグバンドのリーダーになったのはなぜですか。

穂吉 ジャズはヨーロッパとアメリカ音楽のミックスの産物であり、その意味で、日本文化はジャズに関わってこなかった。自分はデューク・ウェリントンはじめ多くのジャズの巨人たちに助けられてきており、彼らはジャズの発展に貢献してきた。だから、今度は自分がジャズに恩返しする番だが、色々な音が欲しい。しかし、小バンドではこれはできないので、ビッグバンドにしたわけです。だからビッグバンドで、自分が作曲した曲しか演奏しません。



下村 「孤軍」「ミナマタ」など、メッセージ色の濃い作品も発表されていますが、どんな思いからですか。

●音楽で意見や考え表明

穂吉 市井の人たちは政治の影響を大きく受けます。文章を書くことができるなら活字で政治に対する意見、考えを発表できると同じように、私は音楽という形で自己表現しています。1999年、広島原爆被爆をテーマにした曲を書いて欲しいと、ジャズファンの広島の住職から頼まれました。しかし、その時は師とも仰ぐデューク・ウェリントンの生誕100年、没後20年の曲を、モンレー・ジャズフェスティバルから依頼されており、多忙だからとお断りしました。すると住職は、いつまでも待っているとおっしゃった。そのうち住職から原爆投下3日後の写真が送られてきました。初めのうちは、原爆投下から55年も経った今、曲を書く必要があるのだろうかと考えましたが、悲惨な状況であればあるほど。希望を見出して生きていかなければならない。反戦の意を込めて

「ヒロシマそして終焉から」を書き、最終章は希望の「ホープ」。2001年8月6日に広島で演奏して36日後の9月11日に、ニューヨークで同時多発テロが起きました。ニューヨークのクラブ「バード」で演奏する際は、ラストに必ず「ホープ」をやります。ミュージシャンは政治家ではないから、政治を変えることはできませんが、曲や演奏を通じて、「ミナマタ」「孤軍」などのように、自分の考えを表明できます。

下村 穂吉さんは、アメリカは仕事場であり、自分は日本人だからと、アメリカの市民権は取っていません。私はそれが穂吉さんのバックボーンだとリスペクトしていますが、アメリカから日本を見て、どう思いますか。

穂吉 アメリカは、その人が持つ技術や能力・才能を大事にして、人間そのものは大切にしません。日本は逆に人間を大切ににするから親切で優しい。技術や能力・才能は二次的なものと考えます。しかし、最近の日本の若い人は、思いやりが少なく辛抱する気持ちが足りず、妙に殺伐としています。アメリカの悪い面を反映しているようで心配です。

下村 穂吉さんにとって「生きる」とは何ですか。

穂吉 イチローがシアトルでやっていた時、アメリカの小学生に「自分は野球という自分が打ち込める仕事を見つけて幸せです」と言いました。私もそう思います。本当にしたいことをしない、自分の可能性を追求しないことは、自分に失礼だと思うのです。やってみないと自分の可能性は分かりません。すぐ諦めてしまうのは、自分に不親切なのです。

下村 最後になりますが、これからしたいことはどういったことですか？

穂吉 まだまだ私には、いろいろなまずいところがあります。これを直していきたい。作品を発表したらそれで終わりではありません。最初のリスナーは自分ですから、不出来なところに気づいたら、すぐに直す。人生も同じでしょうね。

下村 穂吉さんの生き方、考え方は、「生き方塾」で私が常日頃話していることとほとんど同じでした。体調が芳しくない中、今日は本当にありがとうございました。



お土産の和菓子を手にする穂吉さん

勉強会雑感

- …入塾説明会で塾長が話した「ブレない基軸」に共感します。自分と向き合い、他人の言葉に振り回されない自分の基軸を身につけたいと思います。穂吉先生のかわいい小さな手から素晴らしい曲が生まれるのをじっと見ていました。
- …アメリカのジャズマスターでありながら、日本人にこだわり、アメリカ市民権を得ない穂吉さんの生き方を見て、ただぼんやりと日本に生きてきた自分を恥ずかしいと思った。
- ◎○…86歳の穂吉さんが「これからやりたいことは？」ときかれて語った「私はいろいろまずいところがあるから、それを少しずつ直していきたい」という言葉。生きる意欲に驚きました。
- …差別、偏見、ルーツから目をそらさず、一貫してオリジナリティを追求する穂吉さん。「孤軍」の演奏に涙が出ました。
- …坐禅の効用を説いた元島先生。愛のホルモンであるオキシトシンを増やし、いい波動が長く続く話に共感しました。
- …「自分の存在感がないと感じた時は恐怖を感じた」「自分の可能性を諦めるのは自分に不親切」「どんな状況でも最高の音楽をしたい」など、穂吉さんから珠玉の言葉をもらいました。

福島有朋高等学院出前塾

たゆまぬ努力を、と高校生に

「下村満子の生き方塾」出前塾の第2弾は、9月30日、福島市の県文化センターで福島有朋高等学院の生徒、教職員、保護者ら130人が出席して開かれました。下村塾長は「いのちとは何か、生きるとは何か」のテーマの下、前向きに、「自分の可能性を信じ、たゆまない努力をしながら生きる」ことの大切さを訴えました。午後1時半開始という生徒にとっては「お昼寝タイム」での講演でしたが、生徒は体験に基づいた塾長の話を、一言も聞き漏らすまいと真剣そのものでした。この日は三田公美子「生き方塾」事務局局長、福島世話人代表の皆川猛、同じく世話人の伊東優子塾生も参加し、「私と生き方塾」をテーマに3分間スピーチをしました。出前塾の第3弾は12月6日、郡山市の郡山ザベリオ学園中学校で開かれます。

出前塾

●ギアチェンジ忘れた日本人

——「生き方塾」はカルチャーセンターでも、教養講座でもありません。「いのちとは何か、生きるとは何か、人は何のために生きるのか」といった、学校はもとより家庭でもあまり教えない事柄をテーマにして、共に話し考える場です。入塾条件は、人間であること、だけです。但し、年齢は、一応15歳以上。誰もやらないテーマを掲げる「生き方塾」は、そういった意味では異色だと思うのです。

今日の講演テーマは「いのちとは何か」「生きるとは何か」です。生き方を学ぶには適齢期はないと思います。それは各年代によって悩みは違って来るし、私自身も年相応の悩みや困難を抱え、生き方については毎日悩み、学んでいるのです。でも、どう生きるか、いのちとは何かといった人生の底に流れるテーマは、できるだけ若い時からに学び、考えることが、私はとても大切だと思っています。大人になって困難に遭遇してから学び、考えるより、はるかに無駄な苦勞をしないですみます。人はいくつになっても悩みからは解放されないのです。若い人こそ「生き方塾」に来てほしいのですが、学校通いや会社勤めなど、若い人ほど時間的な制約がありますから、こちらから出向いて「出前塾」をやろうと思ったのです。

私は皆さんのおばあちゃんの世代で、戦争を実体験した最後の世代です。旧満州(中国東北部)で育ちました。戦争で日本が敗れ、全てを失って引き揚げてきた私たち一家が、ひとまず落ち着いたのは、父の母、私の祖母が留守番をしていた福島県二本松の父の実家でした。3人姉弟のうち、私だけが2年間二本松の祖母にあずけられ、地元の小学校に通いましたから、姉弟の中で私が福島に対する思い入れが一番強いのです。

終戦から二本松に落ち着くまでの道のりを振り返ると、今こうしてここに立っていることが、不思議に思えます。食糧難、略奪、内戦など大混戦が続き、日本に帰ることができないで、満州の荒野で亡くなった方も数多くいます。

どうしたら食べられるか、どこで雨露をしのげばいいの、といった敗戦の廃墟から私たち日本人は立ち上がり、死にものぐるいの努力の末に、世界有数の経済大国にまでなりました。そして私たちは日本の歴史上かつてなかったような物質的豊かさを手にしました。しかし、物質的な豊かさと反比例し、心は貧しくなってしまった、心を病んでいったのです。難しい言葉で言えば、心が「劣化」したのです。物質的に豊かになった時に、モノ最優先から、心を大事にする方向へギアチェンジしないまま

ま、相変わらず物質的豊かさやお金、肩書などを追求する活動を最優先してきました。社会的な肩書や、立派な家に住んでいるといった外見で、その人の価値を評価する社会になったのです。

朝日新聞を退職してから、私はフリーのジャーナリストをしています。これまでのジャーナリストの仕事をする中で、日本人の心の再生なくしては、日本という国の復興はないと考えるようになりました。日本に住む私たち一人ひとりの心のレベルを上げないと、日本のレベルが上がるわけではないのです。本来日本人が持っていた人を思いやる気持ち、自然と調和した暮らし、謙虚な気持ちといったものは忘れ去られ、自分だけが良ければといった利己主義が蔓延しています。何とかしなければという思いから、「生き方塾」を始めました。人にはそれぞれの生き方がありますから、私の考えを押し付けはしません。私が塾生にいつも言っていることは、「ブレない自分を作り上げてください」ということです。確固たる価値判断基準を基軸にすれば、ブレない自分を作り上げられます。その判断は、そんなに難しい医哲学とか宗教ではありません。「人間として正しいかどうか」ということです。嘘をついてはいけない、感謝の気持ちを持つ、弱い者いじめはしない、欲張らない、謙虚であれなど、ごくありふれたことなのですが、頭では分かっている、いざ毎日の生活となると、そうではないのが現代人です。

今は平和であっても、明日はどうなるか全く分からない時代です。世界各地でテロや内戦、紛争が起き、北朝鮮は原爆開発に躍起となっています。つまり、明日は今日の延長と考えて生きることはできません。そこで問われるのは、何があっても右往左往しない「人間力」です。別の言葉で言えば人間として生きていく力です。もちろん学校の勉強も大事なことは言うまでもありませんが、教わったことをしっかり記憶し、試験で良い点数を取ることは人間力養成にはあまり役立ちません。実社会に出た時、教わった知識をどうやって社会のために役立てていくのか、応用するのか—それが大事なのです。成績が悪いことで、自分は駄目なのだと決めつけ、自分で自分の人生に×をつけるのは、一番人間力がないことです。

皆さんは学校で学び、やがて社会に羽ばたくことでしょう。しかし、最終的には自分の人生は自分で生きるしかないのです。あなたの人生をかわりに別の人が生きることはでき



出前塾で講義する塾長

ません。人に変わってはもらえません。自分の足でしっかり立つ。それが人生の第一歩なのです。どんなに恵まれた環境にあって、富裕な家庭に育っても、戦争が起きれば、一夜にして財はなくなります。そんな時でも、人間力のある人は、自分の足でしっかり立ち、生き抜くことができます。どうしようと、右往左往することはありません。エネルギー、前向きな考え、なにくそというような精神力、パワー、成し遂げたい夢、目標を掲げてやりたいことをやっていく。これこそが大事な人間力なのです。皆さんは学校や職業を選ぶとき、親や周りの人、先生たちからいろいろ助言を受けます。それは大事なことです。最終的には自分で選ぶしかないので。あなたが選んだり、決めたりする道に親も責任は持てません。なぜならあなたの道を歩むのはあなた一人であって、親といえどもあなたに代わって歩くことはできません。

最近の若い人の中には、自分は何をやっているのか分からない、という人が増えています。でも本当は何をやりたいのかが分からないのではなく、自分と真剣に向き合っていないのです。自分のことは自分が一番分かっている、と言うのですが、最近の人は、周りが自分をどう見ているのか、といったどうでもいいことばかりを気にして、何をやりたいの、どんなふうに生きたいのかと、自分で自分を見詰める、自分は一体何者かと自問自答する、といったことはしていない気がします。いい大学に入ったね、いい会社に就職できたね、すごいね、と周りから言われことを期待して生きているように思えるのです。いろんな人に褒められる。これは決して悪いことではないけれども、周りの人はあなたの人生に責任を持ってくれません。皆さんはまず、自分は何をやりたいのかを自問自答しなければなりません。それをしていると、初めはボンヤリしていたものが、次第に固まってきます。そうして見つかった本当にやりたいことは、困難があってもあまり苦勞とは感じないものです。

母は医者だったので、母も父も私を医者にしたかったです。私も両親の思いにこたえて医者になろうと思い、慶応女子高に入りました。学年で2番以内なら推薦で慶応の医学部に入学できるからです。でも、学年を重ねていくうちに、どうしても、ものを書くのが好きで、活字の周辺の仕事をしたいと強く思うようになりました。物書きになるとか、新聞記者になるとかというような大それた考えではありません。原稿取りでもいい。活字周辺の仕事とはそういうことです。両親が勧めたように当時、医者は女性にとってとてもいい、有利な仕事でした。経済的にも社会的立場も保障されています。でもどうしても、私は医者になる気が湧きませんでした。それで親に、「どうしても医者になりたい気になれない」と告げると、親は「じゃあ、何をやりたいのか」と聞きます。「活字周辺の仕事」と答えても、当時、女性にはそういった道が開けて

●受け止め方で変わる人生

私は昨年、失明宣告をされましたが、いい先生に巡り会って奇跡的に失明は免れました。この失明宣告から、多くのことを学びました。病気の人の心の痛みが、もっと分かるようになり、失明宣告は神様が、私の心のレベルを上げるため、私に与えた試練と考えることができました。私とは逆に、失

いませんでしたから、分かってもらえませんが、でも内面から強く湧き上がる気持ちを否定できませんでした。親もようやく

私の気持ちを分かり、最終的にはジャーナリストになったわけです。ジャーナリストになるまでは障壁や苦勞の連続でしたが、自分が好きだった道だから、苦勞も苦勞と思わずやって来ることができたのです。ですから皆さんもまず、何をやりたいのか、どんな人生を送りたいのかを自問自答する習慣をつけてほしいのです。他人の目とか、他人から言われることを気にしないで、自分と向き合ってください。

もう一歩進んで、「人間とは何か」について考えて欲しいのです。皆さんは「自分は何者?」と考えたことがありますか。質問します。最前列に坐っているあなたは何者ですか? そう、〇〇君ですね。では〇〇君は何者ですか? そう、男子ですね。男子の〇〇君は何者ですか? そう、人間ですね。では人間とは何者ですか? 答えることが面倒になりますね。この先、私が「人間とは生きている動物です」では「生きているとはどういうことですか」「いのちがある状態です」などと質問し続け、「ではいのちとは何者ですか」と聞いたら、「生きていることです」となり、堂々巡りとなります。しかも、「何のためにあなたは生きているの?」と聞かれたら、何と返事しますか? 皆さんはこんなことを考えたことはないでしょう。気が付いたらこの世に生まれていたわけでしょう。「何のために私は生まれたの?」「どうして私はここにいるの?」などはあまり考えませんよね。でも本当は、「私は何のために生まれ、何をすべきなのか」を考えないと、毎日「食べては寝て、食べては寝て」の生活になり、気が付いたら死を迎えるだけになります。

皆さんはどこから来て、どこに向かっているのですか? お母さんのお腹から生まれました、と答えるでしょう。ではお母さんのお腹に入る前にはどこにいたのですか? 分からないでしょう? そういう本質的なことを誰も考えずに、毎日を面白おかしく生きているのが大部分の人です。生まれて、親に育てられて、学校を卒業して、就職して、結婚して、子どもを生んで育てて、気が付いたら50歳になっていた。こんな人が大半だと思います。その間には楽しいことも辛いことも、悲しいこともあり、病気になるったり、いろんなことがありますね。その試練の時に、どうして乗り越えていくか。不幸や試練をどう乗り越えていくのか。それこそが「生き方」なのです。若い時から生き方の基本を学び、身につけていけば、ピンチに遭遇した時も、乗り越えることができます。苦しいこともきちんと受け止めて、これは自分が試されている場なのだ、と前向きに考えることができます。



塾長の講義を聞き入る有朋高等学院の生徒

じ苦しみでも、それを逆手に取って自分のプラスになるよう頑張る人と、ただただ嘆き悲しむ人がいるのです。ふて腐れて社会のせいにして親のせいにして、人間として段々と墮落していく。こうして不幸な人生を送る人を、私は大勢見てきました。自分を取り巻く環境は周りが作ったものではなく、自分が招き作ったものだと思うのです。環境は自分の心の持ち方、考え方一つで変えることができます。

よく「頼みもしないのに親が勝手に生んだのだから、仕方ないので生きてやる」などと捨て鉢なセリフを口にする人がいます。しかし、頼みもしないのに生まれた命なんてあるでしょうか。宗教や神様の話しをしても、今の人たちは、「そんなもの信じない」と言うでしょう。ですから「いのち」を科学的に話したいと思います。筑波大名誉教授に村上和夫という遺伝子学者がおります。私も親しくさせていただいている方です。村上先生はこう言います。

「いのちは、38億年前に、一つの遺伝子から始まり、38億年の間に分裂を繰り返して、現在3千万種類の生物になりました。人間もそのうちの一つでしかありません。魚も、花も、蝶も、象も、鳥も、ゴキブリも、そして人間も、先祖をたどっていくと、源は38億年前の一つのいのちにとどり着きます。すべての生き物は、まったく同じ遺伝子暗号を使って生きています。我々が日常生活で先祖と言うと、曾おじいさんぐらいまで、家系図のある名毛でも、せいぜい300年とか500年ですが、38億年をさかのぼった最初の先祖は、一つの遺伝子、一つのいのちに行き着きます。ということは、単細胞の初期の生物から人類のような高等動物まで、みんな先祖は同じであり、みんな命は繋がっているということです」

3000万種の全生物は、皆親戚ということですから、中でも、人類同士は極めて近い兄弟のような存在なのです。人類同士は敵なのではなく、みんな親せきなのです。同じいのち、一つのいのちを共有しているわけですから、仲良く地球の上で助け合って生きていくのが、本来の姿なのです。ですから、他人を殺すと言うことは、自分の命を殺すことと同じなのです。「人を殺すのがなぜ悪いのですか」と言う人もいます。それは相手を殺すことは、命のつながりを切ることですから、自分を殺すことでもあるのです。網状のネットがあるとします。そのネットの一部が切れると、バラバラとほどけてしまいネットは壊れてしまいます。人のいのちも、そのネットと同じようなもので、一つが壊れればやがて、大きく壊れていくのです。それがいのちの本質なのです。

先程私は皆さんに「どうしてここにいるの。そんなことを考えたことがありますか?」と聞きましたが、皆さんがこの世に生を受ける確率は、70兆分の1だそうです。これはジャンボ宝くじに、百万回連続当選するぐらいの奇跡的な確率なのです。お父さんの染色体は23個、お母さんの染色体も23個あります。これが掛け合わされて生まれる子どもの組み合わせパターンは70兆もあるそうです。で、あなたはその70兆もの組み合わせパターンの中から、一つ選ばれて生まれてきました。数億匹いる精子の一つだけが卵子と結びついて、受精卵になるのです。受精のプロセス、染色体の組み合わせパターンという高いハードルを乗り越えてきたあなたは、たった一つのかけがえのないいのち、エリート中のエリート、奇跡の存在なのです。「自分は能力がない」「自分は頭が悪

い」などと、自分を大切にしない、自分を否定する人がいますが、これまで述べたようにここに、存在するだけで、すごいことなのです。まずそのことに感謝することでしょう。

人間は同じ遺伝子情報を使いながらも、顔つきも、体系も、得意とする分野も皆違います。「世界に一つだけの花」という歌があるけれど、皆さんも、たった一つの花です。花にもいろいろあります。赤い花もあれば黄色い花もあります。そこには優劣の差などありませんね。「生まれつき自分は頭が悪い」「自分は音楽の才能がなくて音痴だ」「私は運動神経がないから」などと、人はよくネガティブなことを言いますが、実はそうではないのです。村上和雄先生はノーベル賞を受賞した天才と言われる科学者と、私たち凡人との遺伝子の差は、たった0.1%ぐらいしかない、と言います。ということは、神様は、人間を平等につくった、DNAに全ての可能性を与えてくれているのです。類人猿のチンパンジーと人間の遺伝子の差も、わずか1.5%くらいだと言われますので、ほとんど差はないということです。つまり、どんな人でも無限の可能性を秘めているわけで、どうして差が生じるかというと、村上先生は、大多数の人は自分の遺伝子の3%しか使っていない、あとの97%は使われないまま死んでいきます、と言います。スイッチが入らないまま、残りの97%の遺伝子は眠ったまま、多くの人は死んでいくのです。その中には病気の遺伝子や悪さをする遺伝子もあるから、眠ったままの方がいい遺伝子もありますが、何とも、もったいない話です。

遺伝子のスイッチはONにできるのです。生まれもっている遺伝子を咲かせること、遺伝子のスイッチをONすることを神様は願って、平等にDNAを人間に与えたのだから、自分と向き合って、自問自答しながら自分のやりたいことを見つけ、与えられたDNAのスイッチをONにしなければならないのです。他人の真似をしても、本当の自分ではありませんから、遺伝子のスイッチをONできません。それは所詮人真似であって、その人以上にはなれません。だから、自分がONにしたいDNAは何なのかを見極める。そのために自問自答が必要なのです。生まれつき絵がうまい、運動が得意というのは、生まれた時点でそれらを司る遺伝子のスイッチが入っているからです。

では眠っている遺伝子のスイッチをONするにはどうすればいいでしょうか。それは、外部からの物理的な刺激や、化学的な刺激によって、入ったり、切れたりすることが分かってきましたが、村上先生はこれらのほかに、精神的なストレスによっても、遺伝子のスイッチがONになったりOFFになったりするのではないかと確信し、1997年にこれを仮説として発表し、「愛が遺伝子のスイッチをONにする」という本も書いています。その当時は、村上先生の仮説を証明するデータはほとんどなかったそうですが、後に様々な実験によって、ストレスが遺伝子のスイッチの「入る切る」に影響を与えていることが分かってきました。ストレスと聞くと悪いイメージしか思い浮かびませんが、笑い、喜び、感動、感謝などのポジティブな心、気持ちもストレスなのです。いいストレスと呼ぶことができます。遺伝子のスイッチは知識の働きで作動するものではなく、感情の動きである感動によってONになったりOFFになったりするものなのです。失敗のショックも遺伝子ON

に作用します。面白い、おかし、悲しい、好き、嫌いなどの感情こそが大切である、と村上先生は言います。だから失敗を恐れることもないのです。また、成功すると気持ちがワクワクするから、スイッチがONになります。

私は1962年夏、ニューヨーク大大学院に留学しました。留学の条件は英語で授業をうけられること、でした。もちろんそんな英語力はありませんでしたが、そこはうまくごまかして、単身渡米しました。授業料免除、しかも寮費はただで、お小遣いまでもらえるいい条件の留学でした。でも私の当時の英語力はお恥ずかしい限りで、大学に着いたらたちまちバテしていました。日本に強制送還されそうになりましたが、学部長に泣きつきました。1学期の間に英語力をマスターするから、強制送還しないで欲しい、と。それから3か月、私は必死で英語を話す力とヒアリングを勉強し、夢も、寝言も英語というまでに英語力を身に付けました。環境が一変したことで、言語習得の遺伝子がオンしたのです。文化も習慣も違うアメリカ留学の2年間に、私の数々の遺伝子はスイッチが入りましたね。

村上先生も1960年代、研究のためアメリカに渡ったことが大きな転機になった、と話しています。言葉の壁、価値観の壁、生活習慣の壁と、いろんな壁にぶつかり、それを自分の力で乗り切るしかありません。先生自身の遺伝子そのものは、渡米したからといって変わるものではありませんが、壁という刺激によって眠っていた遺伝子のスイッチがONになったのだ。遺伝子をオンにするには、まず自分を取り巻く環境を変えることだ、と先生は言います。自分が一番行きたいところに行き、一番したいと思ったことをする。そのための障害は、乗り越えるその行為によって、遺伝子が活性化するからだ、と言うのです。つまり、人間は、自問自答した上、一生懸命に自分が決めた道に沿って頑張り、かつ「人間として正しいこと」を基準に行動していれば、いい遺伝子のスイッチが入るのです。

遺伝子のスイッチが入るかどうかは、環境、本人の意思などによって決まるといのように、全ての事柄は、原因があって結果があります。これを、仏教の世界では因果必然の法則と教えています。自分に降りかかってくる嫌なことも、自分が招いたものと考えます。キリスト教でも、いいことをすれば神様から祝福され、悪いことをすれば罰を受けるというのは、どんな宗教でも同じで、他人を殺してもいい、と教える宗教はありません。

先程話したように全てのいのちは繋がっており、しかも自分はいろんな人のお世話になって生きています。自分一人で生きていくと勘違いする人もいますが、いのちをつなぐ食べ物、農家の人たちが作っているからできるのです。水、電気もそれを一生懸命作る仕事をする人のお蔭なのです。清潔な環境で生活できるのも、ゴミを集め処理してくれる人がいるからです。みんなのお蔭で生きているわけですから、神様からもらった貴重な命を無駄にしてはいけなと思うのです。自分が見つけた本当にやりたいことを一生懸命やるのが、支えてくれている人たちへのお返しになります。さらにできる範囲で他人が喜ぶことをすれば、それは自分に、喜びとなって返ってきます。そういう命の連鎖反応を、大切にしたいのです。

仏教には、「山川草木悉皆成仏」(さんせいそうもく、しっかいじょうぶつ)という有名な言葉があります。現在ある3000万種

の生き物の源はたった一つの命であることは科学によって明らかにされましたが、この言葉は、人間だけでなく、山や川、草や木といっ



お礼の花束を渡される塾長

た大自然にはすべて仏=命が宿っているという意味です。また人は70兆分の1の確率で生まれてきたことを、仏教では「衆生本来仏なり」と言います。衆生とは私たち凡人を指し、私たちは元々は仏の本質を持っている、というものです。仏とは修行をつんで非の打ちどころがない人になった人間のことで

皆さんが先ずすることは、自分自身に自信を持って、絶対大丈夫なのだ他人の顔色をうかがうことなく、自分と向き合って、自分が本当にやりたいことを見つけ、それを人間として正しい方法で実現することです。経営不振に陥っていたJAL(日本航空)を再生した京セラ名誉会長の稲盛和夫さんは、「生き方」という本を書きました。この本の中には、講演の前に流したDVDに出てきたグライ・ラマ法王も話している「自分が思い描いたことは必ず実現できる」と同じようなことが書かれています。これは慰めで言っているのではありません。その代り、「思い」は、ただ何となく思うのではなく、寝ても覚めてもひたすら思い続ける強烈な願望でなければなりません。例えば、好きな人ができれば夜も昼も思い続けますが、それと同じです。寸暇を惜しんでひたすら考え、失敗を恐れず努力をしていけば、必ず思いは実現します。

駄目だと思ったら駄目です。だって自分自身でダメ、と答えを出してしまい、前へ進むドアを閉じるわけですから。出来ないと思うことも、同じです。諦めては絶対いけない。後ろを向いたら、前にある扉が見えないから開けることはできません。ひたすら自分の可能性を信じて、夢の実現に誰にも負けない努力をする。過ぎたことを悔やんでももとに戻すことは出来ないのだから意味がない、まだ来ていない明日のことを心配しても無意味なこと。今日の、今この瞬間を100%完全燃焼していけば、道は開いていきます。

諦めず、目標に向かって必死に頑張ってください。思いは必ず実ります。

●お知らせ

<11月勉強会>

11月勉強会は19日、東京・高田馬場のIZUNOME TOKYOで、開かれます。応援団講義は照明デザイナーの石井幹子さんと、演題は「光は時空を超える」です。出欠連絡は10日(木)厳守です。

<12月勉強会>

12月勉強会兼忘年会は12月23~24日、郡山市の磐梯熱海温泉の四季彩一力で行います。応援団講義の代わりに映画「知事抹殺の真実」を上映した後、この映画を製作した我孫子亘監督、佐藤栄佐久元福島県知事、三田公美子「生き方塾」事務局長、そして下村塾長らでディスカッションします。

この後、美人の湯として定評ある温泉を楽しみ、忘年会が開かれます。参加費は忘年会だけ参加が7000円、宿泊の場合は別途12000円です。忘年会では塾長の特別提供プレゼント抽選、塾生持ち寄りのプレゼント交換会、忘年会実行委員会が趣向を凝らしたイベントも用意してあります。締め切りは11月30日厳守です。